医学と生物学 (Medicine and Biology) Vol. 161 (3): i3_Oj02, 2021

[原著]

看護学生が捉えている看護観

萩野谷　浩美、日高　紀久江、森　千鶴
筑波大学医学医療系

要旨

看護教育のなかでは、学生が看護観を形成できるように教育することが基礎教育の目標となっている。そこで本研究では、看護学生が捉えている看護観を明らかにすることを目的に、看護系大学に在籍している 2～4 年生 9 名にインタビュー調査を実施した。インタビュー結果を逐語録に起こし、質的帰納的に分析した結果、学生が捉えていた看護観は 6 つのカテゴリに分類できた。【自己満足ではいけない】【患者中心に考える】【専門職という自覚をもつ】は臨地実習において、自己洞察をした結果語られた内容であること、また【患者を心身共に支える】【患者をエンパワーする】【患者の人生を考える】は看護専門職者としての役割を示していることと考えられた。今後は看護学生の看護観の形成過程を明らかにすることが課題である。

キーワード：看護観、看護学生

Ⅰ．はじめに

我が国では第二次世界大戦後 GHQ（General Headquarters）の指導のもと看護教育制度および体制が整えられ、現在に至るまで疾病構造や人口動態の変化に応じて、看護師に求められる能力に応じて教育内容が見直されてきている。時代の変化に関わらず看護基礎教育の中で重要視されてきていることの 1 つに、卒業時には学生が独自の「看護観」を培って一人前の看護師になって欲しいという看護教育者の思いがある(1)～(3)。また橋本は、学生の時期には看護者としての自我形成と同時に「人間とは、生きるとは、死とは、病とは」という哲学的な問いに対しても目が開かれる時期であると述べ、「看護観」ということばを用いていないものの、看護実践における価値観の形成を強調している(4)。同様に加藤らも、看護実践の基盤となる看護観を形成することは重要であると述べ、看護基礎教育において看護観を形成することの必要性を述べている(5)。

當間はこれまでの研究において、看護観の形成に臨地実習が関わっていることを指摘し、自身も新人看護師を対象に臨地実習での影響について調査をしている。その結果、看護師のよい言動から学生は強い影響を受け、それが契機になって学生の看護観を培っていたと結論づけている(6)。松江らは、臨地実習によって学生の看護観が形成されると述べている 13 論文を検討し、基礎看護学実習が看護学領域別実習での土台となっていたこと、また、実習目標を明確に立て、各実習目標の関連を意識すること、教員間で共有することの重要性を指摘している(7)。これまでの研究において、学生が臨地実習の経験を経て、自らの「看護観」がどのように変化してきたかレポート課題やインタビューを通して検討したものが多くみられ、学生が自らの「看護観」を形成できるようにすることが看護基礎教育の重要な目的となっている。

萩野谷 浩美
〒 305－85757
茨城県つくば市天王台 1-1-1
E-mail：hagi@md.tsukuba.ac.jp

2020 年 9 月 27 日受付
2021 年 2 月　3 日受理

「看護観」という用語は 1975 年頃から使用されてきているが(8)、以降共通の明確な定義はなく、論文の執筆者がそれぞれの論文で定義している。そこで萩野谷らは、「看護観」について書かれた論文 466 の中から、「看護観」の概念が明記されている 66 論文について概念分析を行った結果、「看護観は、看護の対象者と対峙し自己の看護を俯瞰することを通して、看護に対する自己洞察から得られる看護専門職業人としての行動の指針となる価値観である」と定義した(9)。しかしながら、萩野谷らが概念分析を行った論文は、看護学生のみならず、看護実践経験が豊富な看護師の看護観に関する論文も含まれており、上述の定義はこれらを含めた定義となっている(9)。本来「看護観」の形成は、看護基礎教育の間で完成されるものではなく、看護実践を継続していく限り職業生活を通して発展し続けていくものであると考える。

細川らは、基礎看護学実習を基盤に様々な学習や実習を積み重ねることで学生の看護観が深まっていくと述べている(10)。山下らも、学生時代に培った看護観は看護の知識・技術・態度に影響を及ぼし、看護実践の基礎となり、看護の質を左右すると述べ、看護基礎教育の間に培う看護観の重要性を述べている(11)。また、看護観が明らかになれば、社会や医療の変化に対応可能な看護師を養成するうえで、看護学教育での教授内容や方法を検討することが可能になると考える。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、看護系大学の学生が捉えている看護観を明らかにすることである。

Ⅲ．方法

1．対象者

看護系大学の 2～4 年生までの学生を対象とした。看護を専攻する学生が通る学内通路に公募用のポスターを掲示し、ポスターを見て応募してきた 9 名を対象とした。

2．調査期間

2019 年 3 月 ～ 2019 年 5 月

3．調査内容

インタビューガイドの内容は、現在どのような看護観をもっているか、看護に対する考えについて等とした。

4．調査方法

公募用ポスターを見て応募してきた対象者に対して、説明文書を用いて説明を行ったのち研究参加の意思を再度確認した。インタビューは、インタビューガイドに基づき半構造化面接調査を行った。対象者の許可を得て、インタビュー内容を IC レコーダーに録音した。録音データから個人情報と思われる部分を削除しながら逐語録を作成した。

5．分析方法

作成された逐語録について、学生が現在考えている看護、看護観について語っている部分を抽出し、質的帰納的に分析を行った。分析にあたって 3 名の看護学研究者が独立して分析を行ったあとに、意見が一致するまで討議を重ねることで妥当性を確保した。なお、コードは「　」、抽出されたサブカテゴリは＜　＞、カテゴリは【　】で記載する。

6．倫理的配慮

対象大学の試験期間ではない時期に公募を行い、任意の参加者を募った。また調査対象者には文書を用いて口頭で研究の目的、方法、研究への参加が自由意思に基づくこと、随時拒否と撤回する権利があること、得たデータは目的以外に使用しないこと、プライバーの配慮を行うこと、答えたくない質問には応えなくても良いこと、研究結果の公表の了解等の倫理的配慮を説明した。

さらに参加の可否は成績等には影響がないこと、途中で中断する場合においても、何ら不利益が生じないことを約束した。本研究のインタビューで知り得た内容は、漏洩、紛失等がおこらないように厳重に管理し、学会等で発表する折には、個人が特定できないようにすること等も説明を行い、同意書への署名を得た。なお、本研究は筑波大学医学医療系医の倫理員会の承認（第 1315 号）を得てから実施した。

表1－1　分析結果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
自己満足ではいけない	患者を満たす	患者の満足感が得られるような看護がしたい 患者の納得を得たい 患者に喜んでもらいたい
	私が主体ではない	患者の気持ちを無理矢理こじ開けるのは良くない 私に合わせようとするとうまくいかない 仲良くするだけが看護じゃない 一方的に優しくするだけではよくない 自分の行いたいケアを実践するのはいけない
患者中心に考える	患者との相互交流が大切	患者と話すことが大事 信頼関係が大事 こころの服も脱げるような支援が大切 患者とのコミュニケーションはフランクにとる 患者にしっかり関わることを大切に思う 患者とのコミュニケーションが重要
	患者を理解する	たわいのない話から情報を得る 生身の患者と向き合うことを大事にしたい プライバシーに配慮する 患者を人としてみることが重要である 患者のことを理解したいと思う 患者の思っていることを察しながら聴く 患者の気持ちをしっかり聴いて考える 患者の望んでいることを考える
	患者のペースを考える	個別性が大事である 患者好みにケアを工夫する 患者のペースに合わせ両方向で通じ合う
	患者のために行う	看護はロボットでは替われない仕事である 患者のためになりたい 看護の仕事はきついけど患者の役に立ちたい
専門職という自覚をもつ	医療の一翼を担う	診療の補助も大切な役割である 医療者側の視点でこうした方が良いと考える 医師の指示にも従う必要がある
	緊張感のある仕事	患者の機能回復を目指す 人の命を預かる役割がある
	必要なことを見極める	患者にとって良いことなのか影響を考える 患者にとって本当に必要なことを考える この患者に必要なケアを考える
	正確な知識と技術をもつ	看護技術などの授業が生きる 正確な技術や知識をもつことが大切 手順も正確に行う 理論を基に自分が考えたことを実践する
	目的を明確にする	看護の根拠を示すことが大切 概念やケアの目的をわかってケアをする

Ⅳ．結果

1．対象者の属性及びインタビュー時間

インタビューに応じた学生は、2～4 年次生の各 3 名であり、全員女性であった。インタビュー時間は 25 分から最長 132 分と幅があり、平均は 68.8 分、標準偏差は 36.5 分であった。

2．学生が考える看護観について

インタビューデータを逐語録にし、質的帰納的分析を行った。逐語録から抽出されたコードは 170 であった。類似したコードから、22 のサブカテゴリ、6 カテゴリを抽出した。

6 つのカテゴリのうち【自己満足ではいけない】【患者中心に考える】【専門職という自覚をもつ】は表 1－1 に、【患者を心身共に支える】【患者をエンパワーする】【患者の人生を考える】は表 1－2 に示した。

1）【自己満足ではいけない】

カテゴリ【自己満足ではいけない】では、看護は実践する側の私が主体ではなく、可能な限り患者の思考や感情が満たされるように関わる必要があり、決して看護する側の自己満足ですすめてはいけないと捉えていた自分に気づいたことがうかがえた。カテゴリ【自己満足ではいけない】は、＜患者を満たす＞、＜私が主体ではない＞という 2 つのサブカテゴリで構成されていた。

「患者の満足感が得られるような看護がしたい」、「患者の納得を得たい」、「患者に喜んでもらいたい」というコードから、学生は“患者が満足するように”、“患者が納得するように”を意識して患者に関わっている様子がうかがわれ、サブカテゴリ＜患者を満たす＞を抽出した。また、「患者の気持ちを無理矢理こじ開けるのは良くない」「私に合わせようとするとうまくいかない」「自分の行いたいケアを実践するのはいけない」など、看護は援助する側の私（自分）の思考を優先して実施するものではないという気づきがうかがわれ、＜私が主体ではない＞というサブカテゴリを抽出した。

2）【患者中心に考える】

カテゴリ【患者中心に考える】では、看護を実践する際に患者中心に考える必要があるということに気づいた様子がうかがえた。カテゴリ【患者中心に考える】は、＜患者との相互交流が大切＞＜患者を理解する＞＜患者のペースを考える＞＜患者のために行う＞という 4 つのサブカテゴリで構成されていた。これらのサブカテゴリは【患者中心に考える】ための具体的な方法であると捉えた。

「患者と話すことが大事」「信頼関係が

表1－2　分析結果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
患者を心身共に支える	生活を支える	患者の生活を支えるのが役割 何気ない日常生活援助も看護になる
	患者に安楽をもたらす	苦痛を緩和する 痛みを緩和する 今ある苦痛を抑えられる技術をもちたい
	患者を安心させる	安心感を与えられる看護をしたい 患者にとってこころの支えになりたい 患者は病気を受け止めてもらうと安心する 患者のそばにいるだけでもよい 看護師だから手で触れることができる
	患者の気持ちを癒やす	気持ちの治療が大事である 患者が心細い時にそばにいたい 寄り添い気持ちを楽にしてあげたい 患者が癒やされる時間をつくる
患者をエンパワーする	患者に寄り添う	患者によって態度を変えるのは良くない やってあげているという態度も良くない 患者を理解し、気持ちに寄り添う 自分ができないときには患者に謝る 患者の思いや反応を受け止め自然に寄り添う 患者のニーズに合った看護を提供する 患者のゴールに向かって支える 患者が変わっていくような看護がしたい
	家族を含めて考える	家族の思いを大切にしたい 家族が病気を受け入れているか知った上で関わる 必要な情報を家族からも収集する 家族の力を引き出す 家族が考えていることを促進する
患者の人生を考える	治療環境を整える	治療に前向きに取り組める環境をつくる 病気の人は自分以外の人に理解してもらうことが必要
	患者が自分らしさを取り戻す	患者が好きなことができるようサポートする その人の人生に関わっているという意識をもつ 患者が自分の気持ちを整理できる関わる その人らしい生活ができるような支援が必要
	患者の体験を考える	患者同士も相互作用がある 病院で過ごす時間は患者にとって意味がある
	患者の価値観を看護に活かす	人にはいろいろな側面がある 本来のその人の価値観をみることが大事 その人の価値観を知ると看護に生かせる
	私の価値観が反映する	患者の背景と私の背景を踏まえてケアをする 押しつけにならない程度に自分を出す 今までの自分がにじみ出る 自分の個別性（性格や生育歴）を活かす 私が行う行為に自分がでる

大事」「患者とのコミュニケーションが重要」等のコードは、患者との双方向のやりとりをすることの重要性に気づいたことを示していると捉え、＜患者との相互交流が大切＞というサブカテゴリを抽出した。「たわいのない話しから情報を得る」「生身の患者と向き合うことを大事にしたい」等のコードは、患者を理解するための具体的な手段と捉え、＜患者を理解する＞というサブカテゴリを抽出した。「個別性が大事である」「患者好みにケアを工夫する」等のコードから個別性のある患者を捉えようとしていると考え、＜患者のペースを考える＞というサブカテゴリを抽出した。また「看護はロボットでは替われない仕事である」「患者のためになりたい」「看護の仕事はきついけど患者の役に立ちたい」のコードから、看護における対象者の重要性に気づき、対象者のために行う仕事であることを実感したと捉え＜対象者のために行う＞というサブカテゴリを抽出した。

3）【専門職という自覚をもつ】

カテゴリ【専門職という自覚をもつ】では、看護は医療の一翼を担い、緊張感のある仕事であることを実感し、理論に裏付けられた専門的な知識や技術が必要であること気づいた様子がうかがえた。カテゴリ【専門職という自覚をもつ】は、＜医療の一翼を担う＞＜緊張感のある仕事＞＜必要なことを見極める＞＜正確な知識と技術をもつ＞＜目的を明確にする＞という５つのサブカテゴリで構成されていた。これらのサブカテゴリは、何を以て専門職と捉えたのか、その内容を示していると考えられた。

「診療の補助も大切な役割である」「医療者側の視点でこうした方が良いと考える」等のコードは、看護が医療職であることを意識していると捉え、＜医療の一翼を担う＞というサブカテゴリを抽出した。また、「患者の機能回復を目指す」「人の命を預かる役割がある」というコードから、看護が人々の生命や健康に関与する＜緊張感のある仕事＞というサブカテゴリを抽出した。「患者にとって良いことなのか影響を考える」「患者にとって本当に必要なことを考える」等のコードから、看護者としての判断が必要であることを感じていると捉え＜必要なことを見極める＞というサブカテゴリを抽出した。

「看護技術などの授業が生きる」「正確な技術や知識をもつことが大切」「理論を基に自分が考えたことを実践する」等のコードから、これまでに学習してきたことが臨床実習で必要になると感じることができたと捉え＜正確な知識と技術をもつ＞とい

うサブカテゴリを抽出した。また、「看護の根拠を示すことが大切」「概念やケアの目的をわかってケアする」のコードから、看護を実践するときに目的を明確にすることが重要であると考えたと捉え＜目的を明確にする＞というサブカテゴリを抽出した。

4）【患者を心身共に支える】

カテゴリ【患者を心身共に支える】では、看護の役割として患者の生活への支援や精神的な支援を捉えていると考えられた。カテゴリ【患者を心身共に支える】は＜生活を支える＞＜患者に安楽をもたらす＞＜患者を安心させる＞＜患者の気持ちを癒やす＞の４つのサブカテゴリで構成されていた。「患者の生活を支えるのが役割」「何気ない日常生活援助も看護になる」のコードから、日常生活援助を看護の役割として捉えていると考えられ＜生活を支える＞というサブカテゴリを抽出した。また、「苦痛を緩和する」「痛みを緩和する」等のコードから、痛みや苦痛を緩和することも看護の役割を捉えていると考え＜患者に安楽をもたらす＞のサブカテゴリを抽出した。さらに、「安心感を与えられる看護をしたい」「患者にとってこころの支えになりたい」等のコードから、苦痛の緩和は身体的な苦痛のみではなく、精神的な面にも目を向けていると考えられ＜患者を安心させる＞というサブカテゴリを抽出した。「気持ちの治療が大事である」「患者が心細い時にそばにいる」「寄り添い気持ちを楽にしてあげたい」等のコードから積極的に患者の気持ちを癒やしたいという思いがあると考え＜患者の気持ちを癒やす＞というサブカテゴリを抽出した。

5）【患者をエンパワーする】

カテゴリ【患者をエンパワーする】では、患者の気持ちに寄り添い、患者を励ましエンパワーする看護の役割を意識していると考えられた。カテゴリ【患者をエンパワーする】では、＜患者に寄り添う＞＜家族を含めて考える＞の２つのサブカテゴリで構成されていた。

「患者によって態度を変えるのは良くない」「やってあげているという態度も良くない」「患者のニーズに合った看護を提供する」等のコードから看護師の患者に向き合う姿勢について語っていると捉え、＜患者に寄り添う＞というサブカテゴリを抽出した。また「家族の思いを大切にしたい」「家族が病気を受け入れているか知った上で関わる」等のコードから、看護の対象者は患者だけではなく、家族も忘れてはいけないという思いを語っていると考えられ＜家族を含めて考える＞というサブカテゴリを抽出した。

6）【患者の人生を考える】

カテゴリ【患者の人生を考える】は、看護が看護師の思いで行うのではなく、そこに患者の人生があることを意識し、看護援助に方向を与えていると捉えられた。カテゴリ【患者の人生を考える】は＜治療環境を整える＞＜患者が自分らしさを取り戻す＞＜患者の体験を考える＞＜患者の価値観を看護に活かす＞＜私の価値観が反映する＞の５つのサブカテゴリで構成されていた。

「治療に前向きに取り組める環境をつくる」「病気の人は自分以外の人に理解してもらうことが必要」のコードから、看護師自身を含めて治療環境について捉えていると考えられ、＜治療環境を整える＞というサブカテゴリを抽出した。また、「患者が好きなことができるようサポートする」「その人の人生に関わっているという意識をもつ」「患者が自分の気持ちを整理できるように関わる」等のコードから、患者が自分の人生を歩むために看護師が行うべきことを意識していると考えられ、＜患者が自分らしさを取り戻す＞というサブカテゴリを抽出した。「患者同士も相互作用がある」「病院で過ごす時間は患者にとって意味がある」というコードから患者に目を向け、患者がどのような体験をしているのを見極めようとしていると考えられ＜患者の体験を考える＞というサブカテゴリを抽出した。「人にはいろいろな側面がある」「本来のその人の価値観をみることが大事」等のコードから、病院で入院している患者にはいろいろな役割があり、信念があることを理解したことを示していると考えられ＜患者の価

値観を看護に活かす＞というサブカテゴリを抽出した。さらに、「患者の背景と私の背景を踏まえてケアをする」「押しつけにならない程度に自分を出す」等のコードから、援助する側の個性や価値観が看護実践に影響を及ぼすことも自覚していると考えられ、＜私の価値観が反映する＞というサブカテゴリを抽出した。

Ⅴ．考察

1．学生のとらえた看護観

本研究の結果、学生が捉えた看護観は【自己満足ではいけない】【患者中心に考える】【専門職という自覚をもつ】【患者を心身共に支える】【患者をエンパワーする】【患者の人生を考える】の６つのカテゴリが抽出された。

本研究では、臨地実習の場面に限局してインタビューをした訳ではないが、対象となった学生は、学内での学習と臨地実習を区別して語っていた。学生の看護観は臨地実習を行った時の体験から多く語られていることが認められた。自己の臨地実習での体験から患者との関わりを振り返り新たな気づきを得ることで、自分なりの考えを持つようになっていた。学生は「患者の満足感が得られるような看護がしたい」、「患者の納得を得たい」など、看護を実践する際の＜患者を満たす＞関わりの必要性や重要性を感じていた。また、「私に合わせようとするとうまくいかない」や「仲良くするだけが看護じゃない」等、学生なりに患者に良い関わりをしようと援助を行うも期待する結果には至らず、試行錯誤しながら自分の行動を振り返り、改めて看護の主体は私（自分）ではなく患者自身であることを痛感し、看護の対象、看護の役割について再考している様子がうかがえた。このことは、掛谷ら（2007）の研究においても認められている(12)。掛谷らは、成人看護学実習前後で「看護に対する私の考え」と題したレポートを学生に課し分析した結果、【援助の方向性】【看護の対象】【対象の把握】【看護の専門性】【ヒューマンケアリング】【自己の成長】【健康の概念】【混乱】の８つのカテゴリを抽出している。また、学生が【自己の成長】の必要性を痛感すると共に、学生の看護について確信がもてないことから【混乱】していたとも述べている(12)。学生にとって実習での体験は、自己の混乱を招くほど自己を見つめる機会となっていると考えられた。また萩野谷らの概念分析においても、看護に対する考えや自己の看護を客観視して振り返る【看護に対する自己洞察】が看護観の属性となっていた(9)。本研究の対象である学生は、看護に対する考えや自己の看護を客観視して振り返り、授業で得た知識を確認し、自己の考えを深めたのではないかと思われる。特にカテゴリ【患者中心に考える】では、＜患者のペースを考える＞必要性を感じ、＜患者と相互交流する＞なかで、看護の基本となる患者中心に考えることの重要性を実感できたと考えられた。八木も、学生は患者と関わる中で人の役に立てる自分を感じ、看護師として自分はどうであったらよいのか試行錯誤を重ねている体験をしていると述べている(1)。また実習での体験を通し、看護が＜医療の一翼を担っている＞こと、＜正確な知識と技術をもつ＞必要があること、「人の命を預かる」＜緊張感がある仕事＞であることに気づくことができたのだと考える。学生にとって臨地実習は、“看護”を実感できる場であると同時に、専門職者としての看護の厳しさも感じることができる場になっていたと考える。

野戸らは、成人看護学実習後の学生のレポートを分析し、個人としての対象に着目し、その人に合った方法で自立を妨げず、回復過程をサポートすることや、看護専門職として相応しい姿勢や行動を見つめたものであったと述べている(13)。臨地実習を通して学生はひとりの対象者の状況に目を向け、＜家族も含めて考え＞ながら、患者の＜生活を支え＞、＜患者に寄り添い＞ながら援助することが実感できた内容となっていると考える。細川らは、成人看護実習前後の看護学生 44 名を対象とし、「看護に対する私の考え」と題したレポートを看護観形成過程レベルで分析し、学生が記述した看護観は、段階的に区分可能であったが深まりに困難性を感じたと述べてい

る(10)。萩野谷らが定義した看護観では、【専門職業人としての行動指針】が属性としてあげられているが(9)、細川らの指摘の通り看護基礎教育の段階では、専門職業人としての行動指針には至らないと考える(10)。しかしながら、＜患者が自分らしさを取り戻す＞ことや、＜患者の価値観を看護に活かす＞ことに気づき、看護を実践する＜自分の価値観が（看護に）反映する＞と考えられており、不十分ながらも専門職者としての看護の役割を理解できているようにも感じられた。

2．看護教育への活用

看護基礎教育にとって看護学実習の意義は大きく、学内での学習を統合させる科目となっている。本研究の対象者である学生が、“看護”を理解する場、看護観を形成する場として臨地実習を挙げていたことからも、学生も重要な科目として位置づけていると考えられた。看護学実習は自ら行うことによって、その体験の意義を深めることが重要となっている。デューイは「経験は、常に、個人とそのときの個人の環境を構成する者との間に生じる」と述べている(14)。この個人を取り巻く環境の中には、物理的な環境の他に患者、家族、教員、実習指導者、同じグループの学生など全ての者が含まれている。教員は実習グループのダイナミックスを活用しながら、学びを深めるように関わることが求められている。看護専門職者になる者として、学生が自己成長を実感できること、また、自分の体験を深く洞察することの意義を自覚できるようにする必要があると考える。学生の学びは教員の目標設定のあり方や教育内容とも深く関わることを意識し、看護学生の看護観が形成されていく過程を考慮しながら教育に当たる必要があると考える。

3．本研究の限界と今後の課題

本研究で得られた結果は１施設のインタビュー結果をまとめたものであり、一般化するのには限界がある。本研究では結果として多くの実習体験が語られたが、学生の学年による実習体験は異なるものである。しかしながら、実習体験は個人により捉え方が異なることから、一概に学年に規定されるものではないと考える。また、看護観は実習体験以外にも影響する要因があるのではないかと考え、本研究では３学年を通して分析した。しかし、そのことにより“看護”に対する考え方の形成過程を明らかにすることはできなかった。今後は対象者数を増やすと共に、看護に対する考え方の形成過程を明らかにすることが課題であると考える。

Ⅵ．結論

本研究は、看護学生の看護観を明らかにすることを目的に、看護系大学の９名の学生のインタビュー調査を実施した。その結果、学生が捉えていた看護観は【自己満足ではいけない】【患者中心に考える】【専門職という自覚をもつ】【患者を心身共に支える】【患者をエンパワーする】【患者の人生を考える】の６つのカテゴリで構成されていたことが認められた。

［謝辞］

本研究においてご協力いただきました調査対象者の皆様に、心から感謝を申し上げます。

［利益相反の開示］

本研究において開示すべき COI 関係にある企業は存在しない。

引用文献

（1）八木和子（2006）看護観育成の背景にある実習体験に関する文献的考察，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録，31，122-129.

（2）河相てる美，長谷奈緒美，境美代子（2013）総合実習後の看護学生が目指すなりたい看護師像―実習終了後の課題レポートの分析から―，共創福祉，8(1)，11-16.

（3）長谷川真美，鶴田晴美，中村昌子，熊谷玲子（2014）看護基礎教育における看護観形成に関する研究－基礎看護実習・前後のイメージ変化－，東都医療大学紀要，4(1)，55-62.

（4）橋本智子（1997）看護実践を支える

看護観の育成，Quality of Nursing，3(2)，22-24.
（5）加藤和子，大見八千代，小幡さつき（2011）看護観のレポートからみた卒業時の看護学生の看護観，愛知県立総合看護専門学校紀要，8，11-15.
（6）當間彩（2014）看護学生が臨地実習で看護観を培っていく過程－看護学生時代に看護師の言動から受ける影響－，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録，39，81-88.
（7）松江なる江，冨田幸江（2017）臨地実習における学生の看護観に関する文献の動向，埼玉医科大学看護学科紀要，10(1)，41-48.
（8）国分アイ（1975）“看護観”について思うこと，看護学雑誌，39(4)，327.
（9）萩野谷浩美，日高紀久江，森千鶴（2019）「看護観」についての概念分析，看護教育研究学会誌，11(1)，15-24.
（10）細川つや子，名越恵美，安福真弓，掛谷益子（2006）看護観形成と臨地実習における今後の課題，吉備国際大学保健科学部紀要，11，15-21.
（11）山下満子，和泉春美（2003）看護学生の看護観の育ちと指導上の課題（第２報）―成人看護学実習（内科系）前後のレポート分析と看護観形成に影響を与えた因子から―，京都市立看護短期大学紀要，第 28 号，81-90.
（12）掛谷益子，名越恵美，細川つや子，安福真弓（2007）成人看護実習前後の看護観の変化，インターナショナル Nursing Care Research，6(1)，59-66.
（13）野戸結花，川崎くみ子，冨澤登志子，皆川智子，山内久子（2005）成人看護学実習における看護観形成，弘前大保健紀，４，69-74.
（14）デューイ・ジョン/市村尚久訳（2004），経験と学習，講談社.

Philosophy of Nursing as Perceived by Nursing Students

Hiromi Haginoya, Kikue Hidaka, Chizuru Mori

University of Tsukuba, Japan

Summary:

One of the goals of basic nursing education is to educate nursing students so that they can form a philosophy of nursing. To test this hypothesis, we conducted an interview survey of nine nursing students: three students each in the second to fourth years of college. The interview results were transcribed verbatim and analyzed qualitatively and inductively. The results showed that philosophy of nursing as recognized by the students consisted of six categories. The categories "realizing that they wanted to be thanked," "thinking in a patient-centered way," and "realizing that they were professionals" were derived from the students' engaging in self-insight in clinical practice. Additionally, the categories "supporting patients both physically and mentally," "empowering patients," and "thinking about the lives of patients" described roles of nursing professionals. Our future task will be to identify the process of formation of a philosophy of nursing among nursing students.

Keywords: philosophy of nursing, nursing students